

天文学とプラネタリウム

第142回



www.tenpla.net



今月のお題

チリと星と人と

人と宇宙はどのようにつながっているのか。2本のドキュメンタリー映画が深く切り込みます。

高梨直紘 (東京大学)

平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

世界の中から巨大な望遠鏡が集まる南米チリ。天文学者にとっては素晴らしい観測条件を備えた夢の土地ですが、すべての人にとって理想の土地であるわけではありませんでした。現地の人たちと天文学とが絡み合う複雑な社会を描くのが、ドキュメンタリー映画「光のノスタルジア」と「真珠のボタン」です。

その背景を理解するには、まずチリの近代史を知る必要があります。ヨーロッパによる植民地支配と原住民の弾圧、19世紀初頭の独立、1970年の総選挙による社会主義政権樹立と1973年の軍事クーデター、そして独裁。今は民主化されたチリですが、激動の時代がありました。

「光のノスタルジア」では軍事政権による弾圧が描かれます。チリ北部の砂漠地帯には強制収容所が作られ、数多くの亡骸が広大な砂漠に消えました。果てのない砂漠を歩いて遺骨を探す遺族の一人は「望遠鏡で星ではなく家族を探せないのか」という言葉を絞りだします。一方で天

文学者は、望遠鏡で宇宙を調べることによって人と宇宙の物質的なつながりを解き明かせると語ります。そこには大きな隔たりがあるようにも思いますが、最後に出てくる女性がその隔たりの中に立ちます。独裁政権によって両親が行方不明になっているというその女性は、幼いころに祖母から宇宙の話聞き、厳しい境遇の中でも生きていく希望を見出したというのです。私とあまり年も違わないと思いき彼女の名はヴァレンティナ・ロドリゲス。欧州南天文台サンティアゴ事務所で広報を業務としています。

実はヴァレンティナとは、2013年のアルマ望遠鏡開所式と一緒に仕事をした仲でした。当時はそんなバックグラウンドを持つ人だとはまったく知らなかったのですが、天文学の広報を仕事とする同年代の私と彼女のまわりの環境の違いをこの映画でまざまざと見せられ、強く心に刺さるものがありました。と同時に、彼女が天文学を支えるに生きてこられたということ、また強制収容所から生還した男性たちの唯一の楽しみが収容所から宇宙を眺めることであったということも、深く心に刻まれました。ちょっと大げさに言うと、天文学の意義がそこにもある、と確かに思えたので

宇宙図特別講演会、企画中



東京の岩波ホールにて。

す。

「真珠のボタン」では、チリ南端のパタゴニアに住む原住民「水の民」と、水を宿すかもしれない太陽系外惑星の対比から、天文学と人の営みのつながりが暗示されます。いずれも「楽しい」という感想を抱く映画ではありませんが、ご関心のある方はぜひ。

142

142